
狩人物語

黒崎しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狩人物語

【NZコード】

N6478Y

【作者名】

黒崎しのぶ

【あらすじ】

イケメンで最強な主人公がHUNTERの世界にトリップ!
ネテロの弟子で、紅い閃光と呼ばれる少女ユキノ。

原作を書き回しながら、悪い奴らをフルボッコにしちゃうお話。
オリキャラ多数!只今最終試験中。

設定とか

蒼迅ユキノ（あおはやゆきの）

女。16歳。162cm 43kg

激しく差別されていた一族の長の娘。
兄コウヤと6歳のときに捨てられる。
そこを謎の組織に拾われ、武術をすべて使いこなし、
勉学もすべて理解するようになる。

そのほかは、いずれ本編で明らかになります。
それよか、外伝作つた方がいいですかね？

甘いもの大好き。かわいいものも好き。
幽霊、妖怪といったものが大の苦手。
感情をあまり表に出さない。

人を信じるのが苦手。（過去に何度も裏切られたため）
嫌いな人間にはとことん冷たく、好意を抱いている人間には、
とことん優しい。ブラコン。
人殺しはしない。

9：1の割合で男に間違えられる。
しかし、本人はそれにすら気付かないほど鈍い。
自分の見た目には疎い。

赤髪赤目。細身で手と足が長い。

主になきなたなど、剣系の武器を使つ。（基本は素手）
曲弦師、蜘蛛病と呼ばれる、

糸を使つた戦闘もできる。（主に罠とか、諜報作業のとき）
胸あたりまでに延ばした髪は、後ろで低い位置にひとつひくつて
いる。

首には、蒼い滴型のペンダントをつけている。

通り名・あだ名

紅い閃光

紅い貴公子

レッド・デビル

e t c .

ユキ ゆきりん ユキペー おつまみ

e

t c .

念 特質系

全系統、100%引き出せる。

能力は、そのうち一すみません・・・たぶん知っている技なら繰り
出せる
みたいな感じになると感じます。

「」のほかには、オリキャラ設定など、載せていく予定です。

この小説では、感想を受け付けています！

むしろ書いてください！ここはこうだとか、こうした方がいいとか
などなど

中傷、荒らし以外なら何でもオーケイです。

慌てて作ったので、誤字脱字があるかもです・・・。

「ユキ……」

悲しそうな顔をしながら、俺を見つめる兄さん。

「何でお前が……こんなこと……！」

俺の手を握り、兄さんは泣き出しちゃった。

兄さん……

「『1』めんなさい……俺には『わくわく』しかできなければ……」

はつとしたよつた顔を上げる。

「ユキノ……お……やめり……」

俺の周りに風が起る。

だんだんと俺の体が下から消えていく。

「ユキ！ ユキ！ ……ユキノっ！」

顔の半分が消えた。

兄さんが必死で何か喋っているが、もう何も聞こえない。

「あつがとう……」

兄さん……

もう何も残らない。

挙臂

「兄さん」

俺は生きてます。

元気にしてます。

だから心配しないでください。

俺は強くなりました。

ジンというハンターに拾つてもらつて

色々な人に会い、色々教えてもらいました。

今日はハンター試験です。

俺は内部試験官といつものをします。

兄さん。いつか会いに行きます。

次に会つたら、俺と戦つてください。

あの日のように、負けたりしません。

絶対に勝つて見せます。

だから、会いに行きます。

たとえ、違う世界でも。

その日まで、待っててください。

絶対に会いに行きますから - - - - -

試験開始まで もの

「リリかよ」

ある定食屋を見上げながら俺は思わず呟く。
ネテ口師匠からもらつた地図ではここで間違いない。
でもなあ……『ハンター試験会場』。

本当にここのか。

いつまでも悩んでられないので、俺はドアを開ける。

「こりゃしゃーい

気前のよきやうな親父の声が聞こえた。

「！」注文は？

俺は思わず一矢げる。

「ステーキ定食」

びくり、と反応した。

そんな露骨に反応しかばダメだろ。

「焼き方は？」

「弱火でじつくつ

そう告げると、かわいい女の子が部屋（？）まで案内してくれた。ウイーンと音がし、ゆっくりと動き出すヒレベーター。

少し、重力感覚が狂う。

「お、食つていいのかこれ」

用意してあつたのはおいしそうなステーキ達。
俺はフォークを突き刺し、大胆に噉みつく。
無我夢中でほうばつていたらチン、と音がし、止まる。

「ついたか・・・」

まだ途中だつたステーキを何とか口に詰め込み、
残つたステーキを名残惜しいと思いながらエレベーターを出る。

今年はいい人材がそろつてゐると思つんだよなあ。

何でわかるかつて？そりゃあ勘だ。

だつてはいつた時の空気が俺のときと大分違つし。

そういうや俺のときつて、俺も含めて一人しか残らなかつたんだつけ。
確か、シャル・・・シャルナークといったかな。
ま、なんにせよ

「これからが楽しみだ」

試験開始まで もの

「ユキノさん」

「つはいっー？」

いきなり声をかけられ、俺は思わず情けない声を出す。
周囲の人間は振り返り何事かと俺らを見つめる。
なんだよこの羞恥プレイ。

「ユキノさん・・・大丈夫ですか?」

マーメンだった。いきなり声かけんなよ。

「じめん。間抜けな声でた」

マーメンは苦笑いをしながら、番号札を渡してくれた。

「109番・・・結構遅かつたな」

番号札を胸のあたりにつける。

まあ、しょうがない。その前に師匠に頼まれた（押しつけられた）仕事を

たくさんすませてきたのだから。軽く五力園は回った。

しかもあの狸爺・・・乗り物使つたら即爆破じゃぞとか言いながら
念で爆破装置つけやがつて・・・!あ、もちろん徐念した。
俺の能力で!

なんか、イラついてきた 。

「おじ兄ちゃん、俺トンパつてこうんだがどみ、お近づきのじるしに乾杯しねえか？」

「うそくわ」

声出ひやつたけど、いいか。

でも、心なしかトンパがあろおろし始めた。
もしかして図星だつたり。

なんか不自然で怪しいな。

よし、鎌をかけてみるか。

「それつてホントに何も入つてねえの？なんか変なにおいすんだけ
ど」

もぢりん噉。むじり今、鼻詰まつて何もにおいしないし。

「な、なんにもはじつてねえよつ、い、いいから飲んでみろよ」

あわてながら呟つトンパ。じこまづくつやあ、確實に入つてんな。
俺はトンパに追い打ちをかける。

「下剤入りジユースならいらぬーよ」

言い放つ俺に、トンパは、弾丸の「」とく逃げて行つた。

「・・まさかほんとに入つていたとは」

俺の疑い深い性格、はじめて感謝したかもな。

「はあ . . 眠い」

試験開始まで寝とい。

俺は近くの壁に寄りかかると、すぐさま眠りに就いた。

一次試験。その一

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリ

- - - - -

俺はいきなりなつたベルに、驚き声にならない叫びをあける
びっくりした・・・

「これより試験を開始します」

あ、サトツさん。相変わらずお髪がダンディ。
試験開始かあ。なんか緊張してきたな。

年つてとるもんじやねえな

サトツさんがしゃべり終わり、集団が移動する。

やつと、試験開始か。

「おつおんぎの一みぎかたにいかがやくー」

俺はのんきに歌を口ずさみながら、走っていた。

一見ゆつたり走つてゐるよう видимо, но

るな」と
言われた。

「ねえ、お兄さん…」

後ろから声がする。ゆるーと振り返つてみると、満面に笑みを浮かべた少年がいた。

「俺のこと?」

一応、女なんだけど。

「うん…俺、ゴン＝フリークス…お兄さんな前は…」

「へえ、ゴン君か。いいね、純情な子、好きだなあ。

「俺は、ゴキノだよ。気安くゴキって呼んでくれ」

「うん…よろしくゴキ!」

お互いで手を出し、握手をする。

・・・

「ゴン。もしかして、」

「ん、なんか言つた?」

「いや、なんでもねえよ

」

怪訝そうに首をかしげたゴンだったが、何か思い出したよう俺の手を引っ張り、後ろに駆けだした。

「え、ひみ、ひみお?…！」

足がもつれて、誰かの胸にダイブしてしまった。

その誰かさんは、「うお」と言しながらも、受け止めてくれた。

「すいません・・・」

俺がその人から離れながら言つ。

「大丈夫? ユキ」

「うん、大丈夫・・・」

ゴンは俺がぶつかった男・・・正しくは、青年とおじさんに向かつて俺のことを紹介する。

「クラピカ! レオリオ!」 こちちはユキだよ!」

俺がちらり、と二人を見ると、すごい勢いでそらされた。
なんですか!..

「おいゴン! そいつはトンパが危険だつて言つてたじやねえか!」

一瞬、耳を疑う。

「トンパ・・・? 危険人物・・・?」

「ああ、言つていたぞ、ヒソカと同じような快楽殺人鬼だと!」

快楽殺人鬼だと・・・? 俺が?

「俺は快楽殺人鬼じゃねえし! まず人殺しなんて普通怖くてできね
ーだろ!」

「え・・・?」

「だつて、夜とか出てきそうじゃんか！取りつかれそうじゃんか！」

何が、とはあえて言わない。嫌いなんだよ、そういう奴！

「お前、それほんとか？」

レオリオが尋ねる。

「ああ、人を殺した事なんて一度も・・・」

「ない。言いかけたところで言葉を飲む。
殺しただろ・・・自分を。

「ええい！とにかく、俺は殺さねーの！あいつと一緒にすんな

ヒソカは嫌いだ。変態だから。

「そりだつたのか・・・すまなかつたな」

「いやいや、分かつてもらえればそれでいいんだ

友達が三人増えました。

一次試験。その一

誤解が解けてから、俺らはすっかり打ち解けた。

いや、ほんとによかつた。てか、トンパ。。。

今度脅し。。。げふんげふん。挨拶しに行かなくちゃねつ！

「おいコラガキ！それは反則じゃねえのか！」

レオリオが叫んだ。

これは有名なあのシーンじゃないか！

これは参加するに限るねつ

「なんで？」

キルアがきいた。

レオリオのこめかみあたりに「うすり」と青筋が浮かぶ。

やつべえ、超うけるんですけど！

「これは持久力を試すテストなんだぞ！」

「でも、道具使っちゃいけないとは言ってないよ」

「ゴンがいった。

「一本取ったねゴン君」

俺がにやにやしながら「うう」と、「ゴンもにくつと笑ってくれた。
やばい、超可愛い。

「ねえ、君名前なんて言つの？」

俺が思い切つて尋ねてみた。

「俺はキルア。あんたは？」

答えてくれるとは……地味に感動だ。

俺はユキノ。ユキでいいぜ、もうしぐキルア。

そういうと、ギルアは今に語しかける。

「お前いくつ?」

「(ねえ) 同い年」

お、ここのやり取りは。

「やつは俺も走らうと

キルア、カツコよかつたな。

「おひやんの姐漫也？」

ପ୍ରକାଶକ ମହିନେ ଏବଂ ବିଷୟରେ ଜାଣିବାର ପାଇଁ

俺も入りました。

やつぱりレオリオは老け顔でした。

俺は今年で16。兄さんは、
6歳

よつてレオリオは22より年上となるのだ（何キャラ）！

こつまでもこじられてくるレオリオの肩に手を置く。

「レオリオ」

俺が同情の眼差しを向けると、レオリオは

「ユキ、分かってくれるのか?！」

そんなレオリオとは裏腹の言葉を俺は口にする。

「年齢偽証は立派な詐欺だよ?」

それから30分間、レオリオは口をきいてくれませんでした。

一次試験。その三

もう何時間走つたんだろう。

ぶつちやけペース遅くて疲れてきた・・・。

楽な試験だけど精神的にはつらいよな。

「はあ・・・・・」

「なあ ユキ大丈夫?」

「なんか疲れてるみたいなんだけど」

「気疲れとペースが遅くて逆に疲れた」

「あーそれわかるー!」

「じゃあさ一一番前まで行こうぜ」

やつこつとポンとキルアはスピードを上げた。

もちろん俺も置いて行かれたくないのでペースを上げましたよ。

一人ぼっちは嫌いだ。

そして二つの間にか一番前にまで来ていた。

「階段とかめんどくさい」

「だな。しかしハンター試験って結構簡単かもな」

まあ今のところただ走つてねだけだしな。

これだけで収かるなら楽なんだだけ。

この後色々面倒くさいんだよなー

本当やんなつちやつ。

「ねえといひでキルアはなんでハンターになりたいの？」

「は？俺？・・・・別にハンターにならなくないよ。ものすごく難関だつて言われてるから面倒そうだと思つただけさ。でも拍子抜けした。ぜーんぜんつまんねーし」

本当に思ひとす「こ子どもたちだよね。

ヒソカが氣に入っちゃうのもわかる氣がしてた。

あつ俺とあの変態を一緒にすんなよー。

ヒソカは嫌いだ、変態だから。（一回目）

「ゴンは？」

「俺はね、親父がハンターやってるから。親父みたいなハンターになるのが目標だよ」

「キルアとは違つてまともな理由だね」

「ユキ・・・それじゃまるで俺がまともじゃないみたいじゃねーか」

「まともな人は暇つぶしだなんていいません」

「あははは！」

ハンター試験を暇つぶしどとか・・・

本當天才はちげーな

つーか爆笑のゴンかわい・・・

「で？ ユキは？」

「へ？ 僕？」

「そーだよ。ユキだけ言わねーとかずりーよ

ひみつとふてくられるキルア

おこおいお姉さん暴走しそうだぜ

かわいすげだるいの子ども組

キャラ崩壊して胸キュンキュンしそうだ

?

「俺はライセンスあつたほうが色々と生活に便利だから・・・かな

「かな?って・・・自分のことだらり~なんで疑問形なんだよ」

「いやぶつけ俺もあんまりちゃんとした理由ないかも」

「じゃあ人のこと言えないじゃねーか!」

「こやキルアよつはまともだとおもいつよ

「んだとーーー!」

本当試験中のこすりへ和むの空間。

メインキャラに絡む気なかつたんだけどな。

なんかほつておけないし、何よつこの絡みが心地よい。

久々に孤独感を味合わずにいられるな。

そしてなんやかんややつてこぬつむに出口から光が差し込んだ

一次試験。その四

「うおう、眩しい」

暗かった地下から一変して、湿原へ。
外に出ると、太陽がさんさんと照らしていた。

「やつと地下から出られただぜ」

皆お疲れのようだ。

そりやあ、無理もねえな。原作知つてた俺でも結構つらかったんだ
から。

さつきから、ヒソカのねつとりとした視線がつらい。
前に、仕事で知りあつて目付けられたんだよなあ。

「嘘だ！そいつは嘘をついている！」

突如響いた声。

それは怪我だらけの男からだった。

なんか長つたらしく理屈こねてるけど、
矛盾しまくった。

それよかてめえ、俺のサトシさんにけち付けやがったな。
でも、偽物の言葉を信じてる奴もいた。

あ、レオリオ。

なんか笑ってきた。

俺は一生懸命いられるが、とうとう吹き出しちゃった。

「だはははははははっ！な、なに言ってやがんだよーひやははははー！超受けんんですけどー！矛盾しまくりだつづーのーー！」

だははと爆笑する俺を、冷たく見つめるキルア。

偽試験官は、顔を赤くして、且あわてていう。

「ビーバーが矛盾して云ふと云つんだ！」

手を口に当り、
やがて笑いが止まらなくなってしまった俺は、
説明を始める。

「よく考えてみろよ、人面猿つてのは、貧弱なんだろ？それなのにサトツさんは息も切れてないし汗もかいてない。猿には不可能つてわけだ」

周りから、そういうやそつかも、といつた声が聞こえてきた。
偽試験官の顔はだんだん青くなつてくる。

「それに、

俺はにこっと笑い、止めをさす。

「何で生きてる猿を連れてるのかなあ？」

言い終わると同時に猿と偽試験官にトランプが刺さった。

ヒソカのトランプの餌食になつた一人と一匹を一瞥し、
俺は動き出した集団について行つた。

一次試験。その五

渥原に入り、俺はゴン達と別れ、一人で行動していた。

『だあああつ！お前達うぜえ！』

マチボッケとかジライタケとかサイミンチョウに行く手を阻まれること數十分。そろそろ我慢の限界らしい俺は手を高く振り上げた。

「つてえ――――！」

『おっさんの叫び声？…チツ、アイツか』

おっさんの叫び声が遠くで聞こえ振り上げた手を下ろし直ぐ様元来た道を走り出す。

『（何であいつは大人しくしてらんないんだ。面倒事増やすな死ね）

』

色々な苛立ちが混ざつて今にも爆発しそうな気持ちを必死に押さえ込み血の臭いが濃いところへ向かう。まあ、原作知ってるが、仕事だから、一応行こう。

「うん！君も合格。いいハンターになりなよ。一人で戻れるかい？」

「クリと頷いたゴンから離れたヒソカは何故か氣を失つてゐおつさんを肩に担いで姿を消した。俺は膝から崩れ落ちたゴンを遠くから一瞥しヒソカの後を追つた。

「…キミはつまでも尾けて来る氣だい？」

『やつぱりバレた？』

こちらを見ずに言われおつさんを肩に担ぎながら走るヒソカの横まで走る。ひりりとヒソカを盗み見ると機嫌がいいのかにこにこしている。

『俺の仕事増やすようなことあるなよ』

「だつてあまりにタルいんだもん。選考作業を手伝つてやるつと困つてね」

『受験者の中でお前と同等または上の奴なんて俺とあいつだけだる』

こいつの合否基準が全く理解出来ない。ゴンが合格なのはわかるが氣絶しておつさんを何故合格にしたのか少しだけ気になる。

『…つと、やつと着いた。んじゃ彼は預かってへよ』

一次試験会場らしき場所に着き俺達は足を止めた。ヒソカからおつ

さんを受け取り近くの太い木まで引き摺る。

「相変わらずだなあ、コキは。くへっ、そこが可愛いんだけどね」

舌なめずりをしてそんなことを言つてこたなんでもちひん俺は知らない。

一次試験開始まで。その一

俺はレオリオが入る木の下で一次試験が始まるまで待っていた。

「ふう . . .

暇すぎる。することない。

さつきまでレオリオで遊んでいたのだが、いい加減あきて
ケータイをいじっていた。

ジンからの着信履歴が275件。
仕事の依頼が7件入っていた。

つーか、ジンドんだけかけたんだ。

俺が悩んでいると、手に持っていたケータイが震える。
誰かと思い見てみれば、案の定ジンだった。

「もしもし」

『つづキか？何度かけたんだぞ』

『試験中だつたんだよ、てかかけすぎだつーの』

『しようがないだろ、心配だつたんだから』

『ふーん。じゃつ！』

『あつてめつ、切るな』

ジンが何か言つていたが、無視して切つた。

どうせ危ない奴は即ぼこれとかしかいわねーもん。

あるといふタイミングで「コン達が駆けてきた。

「ユキつよかつた、ちゃんと合格してたんだねー！」

「コン、君はさつきまで変態と直面してたつて言つの……俺の心配までしてくれるなんて、なんていい子なんだ！」

「ああ、大丈夫だよ。というかレオリオがどうしたんだ？」

知つてゐるナビ（笑）

「やうなんだよ、俺も覚えてねえんだよな

「つまつま…？」

絶対に寝ていいと思つていた俺は、下から聞こえた声に素つ頼狂な声を上げる。

「ユキ……」

「クラピカ、そんな田で見ないで」

憐みの田で見てくる、クラピカ。

そんな田で見られたつて、いたたまれないから。

「といづり、何で中に入つていのだ？」

「ああ、それは」

入れないんだよ、そつぱおうとした俺をやめさせつ、銀髪美少年もといキルアが言つ。

「入れねえんだよ
「キルア！」

ゴンはキルアを見つけ、うれしそうだ。
一人で話し始めた二人を見ていたら、レオリオに話しかけられた。

「なんだ、羨ましいのか？」

いやにやしながら言つたレオリオ。

「いんや、若いっていいなと思つて」
「ユキ。お前は幾つだ？」
「十六だけど」

言つた瞬間、四人が固まる。あ、タイムストップとかは使ってない。

「え・・何さ？」
「いや、13ぐらいだと思つてたから」
「ははは、俺3つも若返つてたか」

身長大分伸びたと思つたんだけどな・・
地味に悲しい。

そんなこんなしているうちに、12時になり、
ドアが開いた。

さあ、二次試験スタートだ。

一次試験。その一

重々しい扉が開くと脚を組んで椅子に座っている美人試験官のメンチとその後ろで腹を空かせためちゃくちゃ『力い大男のブハラがいた。

『（あの獣が唸つてゐるよつた音つてあの人のお腹の鳴る音だつたのか…）』

じ一つとブハラさんを見るとまた背後から微かに殺氣を感じた。ちらりと見ればヒソカが2人に殺氣を放つていた。何をしているんだあの馬鹿は。

「どお？おなかは大分すいてきた？」

「聞いてのとおりも一ペコペコだよ」

「そんなわけで一次試験は料理よ！！美食ハンターのあたし達2人を満足させる食事を用意してちょうだい」

まずはブハラさんが指定する料理を作りそれに合格した人だけがメンチの指定した料理を作るというのが一次試験の内容。そんなブハラさんのメニューは「豚の丸焼き」だそうだ。

「森林公園に生息する豚なら種類は自由！それじゃ一次試験スタート！」

スタート開始の合図がされたと同時に受験者は一斉に森の中へと駆け出した。俺も森に向かおうと後ろを振り向けば少し離れたところでヒソカがにんまりと笑って手招きしてるのが目に入ってしまった。

『（見なきやよかつた。何であいつ俺の目にに入る場所に立つてんだよ。）』

大きな溜め息をついて、ゴンとクラピカ、レオリオの元から静かに離れた。

「オレ達も早く行けりやせ……ってコキは？」

「あ、本当だ。でもキルアもいないし大丈夫じゃない？」

「レオリオは人の心配より自分の心配をした方がいいのではないか？」

「てめー、どうこう意味だよー？」

「まあまあ……」

そんなこんなで、ゴン達も豚を捕獲するために会場を出た。

一次試験。その一

「……何で俺がお前の為に力使わないといけないんだよ』

「そのかわりボクがユキの分の豚も取つてきてあげたじゃないか』

「ぶつ叩いて豚2頭取つてくんのと豚2頭焼くのどっちが大変だと
思つてんだよ』

ぶつぶつ文句を言いつつヒソカが取つてきた2頭の豚をこんがりと
焼き上げる。

普段焼きにくくてばかりだから焦がさないように調節するのは少し
難しいことがわかつた。

「ほー、出来上がり。それと持つて行くぞ』

「ユキがいてくれて助かったよ』

「キモいこと言つな死ね』

いやいやしながら豚を受け取つたヒソカに舌打ちをしてブハラさん
の元に向かつた。

* * * * *

「うんおーしゃーー！」れもつまいー「うんうんイケるー！」れも美味ー！」

「（豚の丸焼き70頭も食べられるなんて… その人本当に人間か？）

」

「あ～～食つた食つた。 もーおなかいっぱいー！」

「豚の丸焼き料理審査！！71名が通過ーー！」

ブハラさんのにいつぶりに誰もが唖然としているヒメンチはドラを鳴らし試験終了の合図をした。

「あたしはブハラとちがつてカラ党よーー！審査もキビシクいくわよー。二次試験後半、あたしのメニューはスシよーー！」

「（スシか… 最近全く食べてないな）」

一次試験。その三

「…何ジロジロ見てんだよ」

「スシがどんなものか知つてそうな顔してゐるから」

「修行時代に師匠と食べに行つた」とあるんだよ。言つとくハナビお前に教えるつもりはない」

頑張れよー、と手を振り一人静かに外に出る。スシよりも先に仕事をやりなればいけない。

「サトシさん、ちよつといい?」

「どうかしましたか?…そつこえは、コキさんは、ライセンスは持つていたのでは?」

「え、あれ?まさか会長に聞いてない……みたいだな。つたくあのクソジジイは…」

どうせ面白やうだとか面倒だとで何も伝えてないんだろう。とな

ると他の試験官にも俺のことは伝わってないと考えた方がよさそうだ。

「実は俺依頼でここにいるんだ」

「依頼、ですか… 一体どんな?」

とりあえずサトツさんに依頼内容を大まかに伝え
紙切れを渡し後ることは任せてスシ作りの為魚を調達しに行こうと
一步前に足を踏み出したその刹那、

「魚ア…?」は森ん中だぜ…?」

「声がでかい…川とか池とかあるだろーが…!」

いやいやお前も十分声でかいから、と心中で突っ込みを入れながら
改めて魚の調達に向かった。

「…なんか嫌な予感しかしないんだけど」

一次試験。その四

「あら、あなたが一番なんて意外だわ」

「……もしかしてメンチ俺のこと忘れた?」

「は? あたしあんたに会ったことないわよ?」

「いやいやいや、あるから。普通に会ったことがあるから」

と言つが会つたことあるのは俺であつて俺じゃないから
知らなくて当然なんだけど(変装してるから)。

取り敢えずそれは置いといて俺は作ったスシをメンチに渡した。

「……タネは筋目に対し直角に切れてるし、シャリの握り具合もいい。素人にしちゃあ中々出来てるじゃない。109番合格よ。あんたはここに座つてなさい」

「うーーっす

「…今の…まさか」

こうつと笑つて少し声のトーンを高めるとメンチは気が付いたのか
田を見開いた。

「あんた… まさかコキ…？」

「おー、久しぶりだな。今まで『付いてくれなかつたら多分俺泣いてたぞ』

〔冗談だけど、と髪を口を開いたがメンチにいきなり抱き着かれた。〕

「うおー？ あ、メンチやーん？ 苦しそから出来たら離れてほしいなーなんて…」

危つて舌を噛むといつた。なんて思いながら首に巻かれた腕が締まり息苦しくなりメンチの背中を軽く叩く。

一次試験。その五

「全然連絡くれないから心配してたのよー。」

『「ゴメン」「ゴメン。仕事が忙しくてや』

「だからって何ヶ月も音信不通にならないでよ」

そんなこんなで暫くメンチの話を聞いていると自信あり気な顔をしたレオオガスシを持って来た。

「出来たぜーーー！オレが完成第一号だーーー！」

「残念だけど第一号は彼よ。……って食えるかあつー。」

「（おおう、さすがにきついよこいれは）」

それからスシと言えるようなものは出て来ずメンチの苛立ちは募つていくばかり。

そして先程から人の作ったやつに対する笑つてたハゲが持ってきた。

「ダメね、おいしくないわ！」

「な、なんだとーー!? メシを一口サイズの長方形に握つてその上にワサビと魚の切り身をのせるだけのお手軽料理だろーが！こんなもん誰が作つたって味に大差ねーべ！?」

「（口イツバカだ。完璧バカだ）なあブハラさん…」

「これはマズいね…」

すぐ隣でハゲを怒鳴りつけるメンチを見て俺達は大きな溜め息を吐く。

ハゲの所為でスシの作り方が受験者達にバレて次々とスシを持って来るが完全に頭に血が上った

メンチの審査はとても厳しく合格者は出ないまま、

「ワリ……おなかいっぱいになつちつた」

合
格
者
1
名

一次試験。その六

「テスト生の中に料理法をたまたま知ってる奴がいてさー、そのバカハゲが他の連中に作り方をバラしちゃったのよ」

「合格者は1人だと審査委員会に電話しているメンチは相変わらずイライラしていく口調が荒々しい。

「とにかくあたしの結論は変わらないわ！一次試験後半の料理審査合格者は272番一人よー！」

「まさか本当にこれで試験が終わりかよ

「冗談じゃねーゼ……！」

「（その気持ちはわかるけど俺に殺氣を向けないでくれ）」

ドゴオオンンー！

突如鳴り響いた音の方に顔を向ければ青筋を浮かべ殺氣立っている

デブがテーブルを叩き割っていた。

「納得いかねェな。とてもハイそうですか、と帰る気にはならねェな。つーかテメエその女に甘い言葉囁いて合格させてもらつたんじやねエのか！？？」

「……は？」

「オレが目指しているのは「ツクでもグルメでもねエ！！ハンターだ！！しかも賞金首ハンター志望だぜ！！美食ハンター」」ときには否を決められたくないなー！」

俺を指差して甘い言葉だのと言つたデブは直ぐにメンチに向き直りとんでもないことを言い放つた。意味のわからないことを言われるし知り合いを悪く言われるしでとうとう堪忍袋の緒が切れた。

「…黙つて聞いてりやグチグチうるせエんだよ。美食ハンターごときだア？ざけんじやねエよ。ハンターでもねエデブがシングルの称号を持つメンチを侮辱するな。それに自分が合格出来なかつたからつて俺に当たつてんじやねエよ。ハンターになるなら凡ゆる知識身に付けとけクソデブ。しかも何キツチン破壊してんだよ。食べ物無駄にすんな。」

「テ、テメエ…ぶつ殺してやらア…！」

先程の言葉が気に入らなかつたらしいテヅは俺目掛けて殴り掛かつて來た。

「強気な奴は嫌いじゃない。だけど、」

ドカッ！…！

「お前みたいな奴は嫌いだ」

拳を躲して人差し指で額を弾けばテヅは勢い良く飛んでいき壁を突き破つて外までふつ飛んでいった。

「（速い…オレでも全く見えなかつた！）」

「はは、あんな大口叩いてたクセにザマアねエなア？次俺の知り合い侮辱したら殺す」

聞こえるわけないんだけど。

デブ同様殴り掛かろうとしていた奴等に止めておく。

苛立ちを抑えるようにテーブルに置いてあるお茶を飲む
それでもいりつきがおそれなかつた俺はコップを片手で握りつぶ
す。

受験者の顔が青くなる。

メンチにギロリと睨まれた。

「余計なマネしないでよ」

「だつて試験官が受験者に手に出したらマズくないか？殺る気満々
じゃん」

「ふん、まーね。賞金首ハンター？笑わせるわ！たかが『テロペン』一
発でのされちやつて」

メンチは立ち上がり後ろ手に隠していたかなり長い包丁をクルクル
と数回まわしてから
宙に投げそれを片手で取る。

「ハンターたる者誰だつて武術の心得があつて当然！！武芸なんて
ハンターやつてたらいやでも身につくのよーあたしが知りたいのは
未知のものに挑戦する気概なのよー！」

「それにしても合格者一人とまじでありやせんか？」

突然上空から声が聞こえ受験者達は慌てて外に出る。
そして上を見上げるとハンター協会のマークがある飛行船が飛んでいた。

「（余長直々にメンチを説得に来るとは… 一体何考えてんだ？）」

遙か上空から躊躇いもなく飛び降りて来たかなり年をとったじいさんの足は向ともないらしい。

「（何者だこのジイサン）」

「（ひゅーか雪せー? 今ので足の雪せー?）」

ざわめく受験者達にメンチが

「審査委員会のネテロ会長ハンター試験の最高責任者よ」と叫びた

瞬間、受験者達は緊張で固まる。

「ま、責任者といつてもしょせん裏方。

こんな時のトラブル処理係みたいなもんじゃ（チチでけーな）」

「（今変なこと考えただろ）のロジジー」

俺は分かったが、緊張しているメンチは会長が何を思ったのかは分からなかつたようだ。

試験の合否について問われたメンチは審査員を降りると言つたが、実演参加するという形で再試験が行われることに纏まつた。

再一 次試験。その一

そして飛行船に乗つて着いた場所はマフタツ山。下を覗けば流れが早い川が流れている。

「安心して下は深い河よ。流れが早いから落ちたら数十km先の海までノンストップだけど。
それじゃお先に」

「マフタツ山に生息するクモワシ。その卵を取りに行つたのじゃよ。クモワシは陸の獣から卵を守るため谷の間に丈夫な糸を張り卵をつるしておぐ。その糸につまくつかまつ一つだけ卵をとり戻つて戻つてくる」

受験者達は俺と同じように谷底を覗いた。
予想以上の激流に立ち竦む者も少なくない。クモワシの卵を取つたメンチは攀じ登つて上がつて來た。

「UJの卵でゆで卵を作るのよ」

「（……簡単じゃってくれぬか。）こんなもんマトモな神経で飛び出
りれるかよー。」

「あーよかつた」

「ハーハーのを待つてたんだよねー。」

「走るのやらひらきつぱり早くてわかつやすこば」

谷底を覗いて顔を青くさせるトロの隣で「ハ」達は躊躇しながら谷底に
飛び降りていった。

それに続いて他の受験者達も飛び降りていぐ。
けれど後ろを振り返つてみればまだ何十人も受験者達は残っている。
恐らく、とこつか確實にこじでキブアップだろ。

「残りは? キブアップ?」

「やめるのも勇気じゃ。リストは今年だけじゃないから」

「（あの日から、俺の志願は美食ハンターだ!、とかこいつやって
ー。」

俺はそんなことを、「ハ」に卵をもらひ、メンチに言つてくるめられた

デブを見ながら
思っていた。

三次試験まで もの

「残った43名の諸君にあらためてあいさつしつかの。わしが今回のハンター試験審査委員会代表最高責任者のネテロである。

本来ならば最終試験で登場する予定であつたがいつたるにして現場に来てみるとなんともいえぬ緊張感が伝わってきてこゝもんじゅ。せつかくだからここのまま同行させてもらひうことある

「次の目的地へは明日の朝8時到着予定です。

こちから連絡するまで各自自由に時間をお使い下さー」

会長とマーメンが部屋から出て行くと緊張の糸が解けた受験者達は目的地に到着するまで各自自由に時間を潰し始めた。
クラピカとレオリオは疲れたらしく周りに気を配りながらも各仮眠を取っている。

そんな中ゴンとキルアは飛行船の中を探検しに行つた。（誘われたけど一重にお断りした）

ネテロ師匠のボールを取るのは俺も一年かかった。もうこりごりだ。

「ねエ、今年は何人くらい残るかな？」

「合格者つてこと?」

「そ、なかなかのツブぞろいだと思うのよね。一度ユキ以外落としこいつ言うのもなんだけど。サトツさんども?」

「ふむ、そうですね…新人がいいですね。今年は」

あ、やっぱリー！？とテンションが上がっているメンチを横目にテーブルに並べられた料理を口に入れる。流石ハンター協会だ料理が美味い。

「ユキノはどう?」

「俺は405番と99番がいいと思つ。後はあのハゲもいいんじゃないか? ブハラさんは?」

「そうだねー、新人じゃないけど気になつたのがやっぱ44番…かな。

メンチも気づいてたと思うけど255番の人気がキレ出した時一番殺

「氣放つてたの実はあの44番なんだよね

「デブがキレて俺が『ヤッピ』したときは今にもうすでに向かって
来そうなほど殺氣立っていたのはヒソカだった。

「抑え切れないって感じのすごい殺氣だつたわ。
でもブハラ知ってる？あいつ最初からああだつたわよ、
あたしらが姿見せた時からずーっと。あたしがピリピリしてたのも
実はそのせい。
あいつずーーーとあたしにケンカ売つてたんだもん」

「それサトツさんのもそりだつたよな。
ここにいる全員強いから問題ないだろ？けどあいつは快樂殺人中毒
者だから気をつけた方がいい」

「ええ、そうですね。彼は我々がブレーキをかけるといひでためら
いなくアクセルを
踏み込むような異端児のようですからね」

「（異端児か…）」

その言葉を頭の中で繰り返しながら最後の一 口を口の中へ放り込む

「（）馳走様でした。一応受験者だし試験内容聞くわけにもいかないからそろそろ戻るよ」

メンチが何やら言っているが気にせず部屋を出る。

男ばかりのむさ苦しい部屋にいたくないので夜景が見える窓の側にあつた長椅子に座った。

「いい加減出て来い」

「よく気付いたねユキ」

「当たり前。てかイルミ……ああ、ギタラクルだっけか」

顔面に無数の鉗を刺しているギタラクルは音もなく俺の隣に座った。

「キルアって銀髪の奴お前の弟だつたよな？なあにー？もしかして弟君が心配になつて来ちゃつた？」

にやにやしながらからかうよつて言えればギタラクルはびくつと反応した。

もちろん俺にしか分からないくらいのものだが。

・・・原作知識ありって便利だなあ

「そんなわけないだろ。次の仕事上必要なだけ。ユキは？」

「なーんだつまんないの。俺はちょっと…仕事?」

「…訊いてるの俺なんだけど」

「細かいこと気にする男はモテないぞ。…あ、そーいえば久しぶりだなー元気だつた?」

「(今更…?)」

「イル!!~.」

「……見ればわかるでしょ」

「顔面に鉛ぶつ刺してる無表情野郎のどじをどう見ればわかるんだよ

…」

長い付き合いでし元気だと云ふことはわかるけど。

「(イル!!)と云ふと落ち着く。やっぱり好きだな」

今頃キルアとゴンは師匠とボール遊びしてんだろうな。

「 . . . 」

キルアの暗殺術見てみたい気がする。

三次試験まで もの

「あれ、『キビリ』このへの」

「ちよつと探検してくる」

やつぱりこいつもたつてもこられなくなつた俺は、イルミと別れて
ゴン達のところに行くことにした。

「迷子にならないでね」

「イルミは俺をこいつだと悪いで？」

あれから十分後。

「嘘嘘嘘ついで……」

見事に迷子になりました。

引き返そうとしても、どうちから来たか分からず。

．．．ん？念を使えばいいだつて？

その時の俺はパニッつて、そんな発想もできなかつたよ。

「はあ～～じよ・・・」

「何がだい？」

鳥肌が立つような、薄気味悪い声（全国のヒソカファンの方すみません）
が、背後からする。

・・・思わず悲鳴を上げた俺は悪くないと黙り。

「俺の背後に立つな

「じゃあ、前ならしいのかい？」

「訂正だ。俺に近寄るな」

「それは無理だね」

そつこいつと変態は俺に一歩一歩近づいてくる。

俺はヒソカとの距離を縮めないよう、一歩一歩下がっていたが。

そんなやり取りが、結局全力疾走となり、俺とヒソカが到着の知らせがあるまで、リアル鬼ごっこしていたのは言わざと知れただろう。

三次試験まで もの（後書き）

ここまで読んでくださつてありがとうございます。
レビュー、感想などどんどん書いてください。
中傷、荒らし以外なら、何でも受け付けています。

三次試験。その一

翌日、予定時間の8時を少し過ぎた頃無事三次試験会場であるトリックタワーと呼ばれる塔の頂上に到着した。

「（二）が三次試験のスタート地点になります。
さて試験内容ですが試験官の伝言です。「制限時間72時間以内に
生きて下まで降りてくること」
だそうです。それではスタートーー！頑張って下さいね」

スタートの合図をするとマーメンは飛行船に乗り込み飛んで行った。

どうやら外壁を這い降りて行くのは無理らしい。

怪鳥に喰われている86番から視線を戻すと40人くらいの受験者がいつの間にか

半分近くいなくなっていた。

「そこで扉見付けただけビヨキも一緒に行かない？」

「（かなり人数減ったな……）こにいれば死ぬことはないだろうし俺

「行へか）うん、やつあるわ」

「元に向かおうと振り返り歩を出した…はずだった。

「うわ…!..?」

「…」「…」「…」「…」「…」「…」

右足を踏み出し左足も前へ出せりとしたがガクリと身体が傾いた。下を見れば足元に隠し扉があつたらしく反応する間もなく穴の中へと落下して行った。

「あんなマヌケな声出すとか恥だ…!
とこいつよつこんな」とに対応出来なかつたこの方が恥だ…!…!」

「おいおこの落ト速度と高さは絶対死ぬだろ。
これ念使うか身体能力ズバ抜けてないとやばいってー誰だよ!こんな
もの考えた試験官は!」

文句を言いつつ足にオーラを集め怪我ひとつすることなく着地する。

「（足地味に痛い…能力者じゃなかつたら死んでたな。
あ、一人死んでるし。うつわ色々飛び散つててグロ）」

血の臭いがした方に顔を向けると着地に失敗したであろう人間が死んでいた。

死体は見慣れてるけど田玉が飛びだし顔面ぐつちゃぐつちゃでぶつち
やけ気持ち悪い。

コシンと身体を足で蹴つて台の上に置いてある手錠を手に取つた。

「これを見つけてんだ？」

その道は試練の道。君達にはいくつかの試練を受けてもらつ。そこに置いてある手錠をつけ時間内に全ての試練をクリア出来れば合格だ。ただし手錠が外れたり切れたりしたら失格だ。それでは健闘を祈る!!

「だそりだけど？」

三次試験官から説明を聞き終わり陰に隠れ気配を消していた

奴の方に声を掛けるとそいつは静かに姿を現した。

「…まさかお前と協力することになるとは思わなかつたぜ」

「（ああ、あんときのバカハゲか）」

「俺はユキノだ。足引っ張るなよ」

「オレはハンゾーだ！ここだけの話だけじよ、オレ忍者なんだよ。
幻の巻物 隠者の書 を探……お、おい話はまだ…！」

「もう試験は始まつてゐるんだ。お前の話に付き合つてゐる暇はない。
どうしても話聞いてほしいなら歩きながらにしろハゲゾー」

俺の右手とハゲゾーの左手に手錠を掛け顔を上げるとハゲゾーは落ち込んでいた。

あれがメンチに鬼のような形相で捲し立てられたときハゲハゲ言わ
れて
トラウマにでもなつたのか。…まあそんなこと俺の知つたことじや
ないが。

扉が開き手錠に72時間で止まっていた時間が0に向かってカウントを始めた。

「よつし、わいつと行……うおわあつっ！？」

落ち込んでいたハゲゾーは扉が開いたと同時に何かを振り払つかのように走り出した……のは良かった。

「ちょ、テメ…何へマしてんだハゲ！！初っ端から足引っ張つてんな！！！」

「わ…悪い…けど実際は足じやなくて手首引っ張つてんだけどな…」

「んなことビリでもいいんだよ…ふざけてんのか！」

扉の先に床がなくハゲゾーは落ちた。別にハゲゾーが落ちようと構わない。

構わないが今俺達は手錠で繋がれてるわけで必然的に俺もその穴に落ちることになった。

三次試験。その一

咄嗟に左腕を伸ばし突起物を掴んで落ちることはなかつたが、流石の俺も片腕だけで野郎一人を支えるのは正直辛い。

「おいハゲ！お前どうにかしろー忍者なんだからどうにかしろー。」

「忍者…よつしゃ、任せろー。」

忍者と呼ばれたことが嬉しかったのかハゲゾーは壁を蹴り俺を抱え高く飛び上がり取り敢えず向こう側に無事に渡れた。

「わざと落ちてみたんだが…」

「おーそつかそつかお前はそんなに俺に殺されたいのか。ん？」

「じょっ、冗談に決まってるだろーよつさと次進もうぜー。」

「ひひりと笑つてゐるがユキノの目は笑つていない。

「マイシの44番と回り歩いて……いや、それ以上にヤバい。

「ローロ…

「……」

一次試験で255番をトペンド吹っ飛ばしたときも今もオレですら身体が震える殺氣…。
タダモソジヤねーな。

「ローロ…

「おーい、聞いてるかー？」

「つーな、なんだ？」

「な、なんだ？じゃない。後ろ見ろ、うしろ

「ローローローローロー……！」

「後ろ……。つーこれヤバくねーか？」

「ヤバいな。このスピードだとあと数秒で俺達あのトゲ付き大玉に串刺しだな」

狭い下り坂を物凄い速さで走っているが回転の掛かっている
刺付き大玉はどんどん加速していく。
普段なら硬で粉々にするか纏か堅でガードするんだけどハゲゾーが
いるからそれは出来ない。

「ローローローローロー……」

「（やるやる本氣でやばいな）よし、決めた。悪いなハゲゾー」

「あ？ つーかオレはハゲ……つー？」

「少し寝ててもいい……って寝かせてから言つもんじゃないか」

右手が拘束されてるからとてもやりにくかつたが何とか左手でハゲゾーの首に手刀を落とし直ぐ様肩に担いで後ろを向く。

そして思いの外近くまで来ていた大玉に向かつて息を吹き掛けた。すると異常なほど冷たい冷気が辺りを包み込み一瞬にして凍り付いた。

凍っている大玉に軽く触れば澄んだ音が響き粉々に砕け散った。キラキラと光るそれから視線を外し足元に移す。

「我ながら上出来だ」

しかし右も左も上も下も凍り付きマイナスの世界になつたここにこれ以上長居すれば氣絶したハゲゾーは永久に目を覚まさなくなるだろう。

それでも俺は別に構わないが、今回はそうもいかない。

俺は仕方なく肩に担ぎ直し少し先にある扉まで歩みを進めた。

ハゲゾーを抱えているというハンデがあるにも関わらず

俺は順調に試練をクリアしていった。何度も捨てて行こうと思つた

けど。

「おー、やつと最後の扉！」

ここに辿り着くまで色々なことがあり右肩が痛いし物凄く疲れた。
ただ気を失っている奴が合格するのは気に入らないが手刀を落としたのは
俺だし諦めて勢い良く田の前の扉を開けた。

「最後の扉へよしそ。今からここにいる全員と戦つてもう」
「戦い方は自由。その手錠を外しさえしなければ何をしても失格にはならない」

代表らしい囚人一人が一步前に出て説明をする。

手錠を外さなければ何をしてもいいだなんてこんな簡単でいいのだ
らうか。

「つまりお前達を殺しても構わないってことだな？」

俺は少し挑発するよしだと言ひ。

「オレ達を殺す？綺麗な顔して面白え！」と言つじやねーか

「ここにいる奴全員は終身刑の凶悪犯罪者だぜえ？」

「兄ちゃんこそ死にたくなかつたら今之内にギブする」とだな！」

ざつと見て150人くらい集まつてゐる囚人達は俺の発言にグラグラ笑い出し一気に騒ぎ出す。

「（地味にムカつくなあ、オイ）」

俺は大きな溜め息をついてハゲゾーを肩に背負いなおす。

「それじゃ始めようか」

腰を低く落とし、構える。

…俺は口端を妖しく吊り上げ試合開始を促した。

三次試験。その三

俺の足元には、さつきまでの囚人たちが倒れていた。
開始と同時に手刀を首元に落とし、気絶させた。

それは、一瞬の出来事。

俺が誰にも劣らないと言えるもの。

それは『スピード』。

嵐、台風、むしろ竜巻が通りすぎたあとのようにだった。

君は、あの『紅い閃光』かい？

スピーカーから声がした。

何て名前だったかな。ポッキー？

「まあ、そう呼ばれてた時もあったかな。あ、ポッキーさん。

俺もう合格？」

リップーだ。109番、294番合格！所有時間9時間37分！

その声とともに、重苦しい扉が開き、俺はそこに足を踏み入れた。

四次試験まで もの

「おや、早かつたじゃないかコキ」

ズザザザザッ！

突然真横からした声に反射的に距離をとる

「そんなに過剰反応しなくてもいいじゃないかツレナイねえ」

「やかましい変態」

忘れてた…、三次試験通過第一弾ヒソカだつた…

指でコメカミを押せながら俺はニヤニヤしてこのヒロ口を睨む

「へへ…、いいねその田舎者とつてもやそられたるよ」

ゾクウツ！

凄まじい悪寒を感じた俺は反射的に距離をとる。

「ユキはイルミと知り合いだつたのかい？」

ヒソカはトランプを捌きながらいきなり俺に尋ねる

「なんだよ、知り合いだつたら悪いのかよ」

「くへくへ…、しかも結構長い付き合いで?」

に、逃げ切れない……しかも若干殺気が……

目を泳がせながら、じまかしているといいたイミングでイルミが入ってきた。

素顔で入ってきたイルミの腰に抱きつく。

・・・・・ほぼ、タックルだが。

「イルミ会つたかった……！」

俺が泣き声を出すと、イルは心配したようにヒソカに殺氣を向ける。

「ヒソカ、青い果実見つけたんだろう。そっちこりゅうかいかけてなよ」

「いつのイルは針に手をかける

「青い果実は実るのを待っているんだよコキは既に熟しているし、色んな意味で美味しいだしね」

ヒソカは舌なめずりをしてトランプを構える。

「ワオ、お互に殺る気満々？」

俺は一人から距離を取りつつ傍観を決め込む。

するとヒソカは肩を竦めてトランプをしまった。

「いいでキミと殺り合のは後々面倒そうだからやめておへよコキは諦めないケドね」

「いつのヒソカは壁に寄り掛かって座った

それを見たイルミも殺氣を消して針をしまつ

「…コキ、大丈夫とは思つけどヒソカ変態だから絶対氣を許したら
だめだよ」

そう言い残してイルミも壁ぎわに歩いていく

「…氣なんか許すわけないじゃん、貞操が掛かってるのに」

俺はため息を一つついて一人とは反対側の壁ぎわに腰掛ける。

ゴン達はラスト一分まで来ないから、それまで寝よう。

昨日は十分疲れなかつたし。

俺は瞳を閉じて、ヒソカ対策に念のため円を広場中に張る。

「ヒソカ、俺が寝てる内に近づいたら殺るからな」

一応そろ釘を刺して俺は「破壊方式」（俺の愛刀）を握り締めた状態で眠りに落ちる。

向こう側から聞こえてきた「残念」とか「言葉は空耳」ということにしておいた。

四次試験。その一

「残り一分です」

アナウンスを聞いて俺は眼を開ける

「… わすがに丸3日も寝るとかえってキツイなあ」

「キッ」と首を鳴らして立ち上がる

それと同時に前方にあつた出口が音をたてて開いた

「あー、ユキも通過してたんだね！」

扉から出でてきたゴンが俺に気付いて駆け寄つてくる

「うん、俺のルートは楽なヤツだったから。ゴン達はボロボロだね」

時間一杯まで色々な罠に追って回されたんだよな？

服の汚れを軽く叩いてあげながら俺はみんなを見渡す

「コッチは仲間割れとかあってかなり面倒だったんだぜ」

「モーだぜ、まあユキがコッチに来てたらこんなに苦労はしなかつただろうケドよ」

レオリオはそういつて背後のトンパを睨み付けた

あ～、そういうふうに言つたなあ、こんなヒト

「ふうん、まあいいじゃん結果的にはみんな通過できたんだしゃ」

こんなヤル氣ないヒト相手にするだけ無駄だし。

レオリオは「そりゃそーだけど…」とブツブツ言つてゐるナビゲーター
「」

塔の外に出るとなんかやらしい田付きの
パイナップルさん（リップー……だよな）が立っていた

「諸君タワー脱出おめでとう。残る試験は四次試験と最終試験のみ」

あと二つか……長かったよつた短かつたよつた……

「これからクジを引いてもらひ。」のクジで決定するのは狩る者と
狩られる者

タワー脱出順にクジを引くよつ言われ、ヒソカの次に俺はカードを
引く。

198番……ってハゲゾーが間違えてゲットするヤツだ。

よし、キルアが倒したところを漁夫の利といひ。

四次試験対策を立てながら俺はみんながクジを引いていくのを眺め
た。

四次試験。その一

ゼビル島行きの船の中、他の受験生達は情報を遮断するために塞ぎ込んでいた

うん、まるでお通夜だね。

辛氣臭いことこの上ない。

気分転換に俺は頭の後ろで腕を組みながら船内を「ひへひへ」とじた。

あんなトコいたらカビ生えちまつ。

暫らく歩くと「ン」とキルアの姿が眼に入る。

「お、ユキ。お前何番引いた?」

キルアが俺に気付いて尋ねる。

俺は引いたカードをキルアと「ン」に見せた

「…198番つてオレと一番違ひだよな…、ユキつてターゲット誰か分かつてんの?」

「一応全員の顔と番号は把握してるぜ?」

「マジ?じゃコイツ誰か分かる?..」

そう言つてキルアは自分のカードを指差す。

「それウモリつてヒトのだよ。帽子被つた三兄弟の一人で俺のターゲットの兄」

キルアは「あ~、あのつまらなそうな三人が」とぼやいた。

まあ実際瞬殺だったもんな。

「パンは?」

知つてるけど一応聞いてみるとパンは頭を搔きながらカードを見せてくれた。

「…………あちやあ……」

「やつぱつコキもそつぱつだら?クジ運ねーよなコイツ

俺の眩きにキルアはやれやれと肩を竦める。

「パンは苦笑いを浮かべてカードを握った。

「…まあ殺し合いしなきやいけないワケじゃないからなんとか工夫してみなよ。

正面から正々堂々じや勝ち目零だし」

俺は立ち上がりて踵を反す。

「ま、お互に頑張つて合格しよ」

それだけ言って俺は一人と別れた。

「2番の方スタート！」

* * * * *

俺は取り敢えず開始と同時に島の中心に駆けて、島全体に細い糸を張り巡らす。ジグザグ蜘蛛病アシダラクといふ。

うちの一族はこの使い手が極端に多かつたからな。

別に円でもいいんだけどそれを何日間も維持するのはハツキリ言ってオーラが勿体ないので却下。

絶をして木の上に潜んで張り巡らせた糸に意識を移す。

：確かに一日田までは大した動きはないはずだから急ぐ必要はないか。

俺は糸を一ヶ所にまとめてくっつてから空を見上げる。

「ハンター試験って暇な時間が多過ぎだよなあ……」

まあ普通のヒトにはギリギリなように出来てるんだろうケドや

うへん、タワーで丸3日寝たから今は全然眠くないしなあ……

「……念の修行するかな、このままじゃ暇に殺される」

俺は周辺に糸で結界を張つてから新しい発の作成と
念でコピーできる技の確認をして時間を潰すこととした。

…一日田、念の修行を一日切り上げて糸を確認する

「ん、クラピカとレオリオが合流したか、キルアはターゲット接触
するまでもう少しあるかな？」

島中の受験生の動向と位置を把握してから俺は木から飛び降りる

「…キルアのトコに行く前に遊んでいこうかな」

クスリと笑つて俺は一直線に駆け出す

三秒からずつに広場のよつな場所に出来る

真ん中にある岩場には鼻が一倍に膨れ上がった状態で縛られたトンパがいた

「あー!アンタは…」

突然現れた俺に田を丸くしながらトンパは呟く

「おやトンパさん、なにか新しいお遊びですか?」

俺は清々しいまでの笑顔で尋ねる

「いやあ、それがとある一人組の受験生にはめられちまつてな、よかつたらコレ解いてくれないか?」

胡つ散臭い笑顔をしながらトンパが頼んできた

俺は首を傾げて問い合わせる

「あれ?ソミーってヒトと一緒にレオリオはめよつとしたのはダレでしたつけ?」

その問いにトンパはギクリと固まつた

「なつ……ななな何でそれを？」

冷や汗をダラダラ流しながら困惑氣味にトンパは尋ねてくる

「さあ？ 何ででしょうね？」

俺は一ツコリと笑つてから一本の缶ジュースを取り出す。

瞬間トンパは見る見る内に青醒める

「そつ...それは...、まさか...まさかアソタつー?」

狼狽えるトンパ眺めながら笑顔貼り付けた状態で俺は一步ずつ近づいていく

「ハヤシ…やめ…やめな…やめな…」

俺はその叫びを無視してプルタブを開けてから片手でトンパの顎をガシッと力強く掴む

「縛られてもぞかし大変でしょ」ガビ、ジュークでも飲んで頑張つて下やこ

そつ言ひて俺は田の中身をトンパの喉に一気に流し込む

「こうこうー、ゲボ、ゴボつー、ゴブツー、ゴボ、ゴボツーー。」

「ああ美味しいですか？そんなに喜ばれるとせ思こませんでしたよ」

一滴残らず流し込んでから空の田を投げ捨てて回れ右をくる

「アロ、アロ、アロ……」

「おや、雷でじょつか？近いですねえ。当たらなによつて風を付け
てくださいねトンパさん？」

やつぱりヒバシッ！ヒトンパのお腹を一叩きしてから俺は歩きだす

背後から泣れみを誘つよくな断末魔と、何かが堰を切つて溢れ出
す音が響き渡つた

「あ…あ…、ああああああ…」

バイバイ、トンパ。キミのことは忘れないよ

俺は合図してからキルアのいる方向に向かつて走りだした。

四次試験。その三

キルアがさつきまでいたところを眺めると三人組が悔しそうに蹲っていた。

わちやあ……、ちょっと長く遊びすぎたか……。

俺は肩を落として俯く。

あ～、しかたないなあ……適当に三人狩るかあ……

そう思つて方向転換しようとしたところで背後に気配を感じた。
同時に背負つていた「破壊方式」を手に取り相手の首筋に刃を充てる。

「わっ！？ストップストップ！！オレだよコキ！」

そこには両手を上げて固まっているキルアがいた。

「あ、ゴメンゴメン反射的につい」

やつは「ぼくは「破壊方式」を背負い直す。

「っこ、で殺されたらシャレになんなーよ

キルアは撫然として呟く。

「キルアもうプレート取ったでしょ？」

「あれ？ なんで知ってるの？」

「やつあやこで悔しがってる兄弟がいたからね

やつとなるせじね、とキルアは納得した。

「あ、そこにはプレゼントがあつたんだ」

やつはキルアはポケットからプレート一枚取り出して俺に放つた。

「ワオ！ 198番じやん」

「それヨキのターゲットだな。ついでに取つといた」

感謝するよ」とキルアは笑つ

「うん！ありがとうキルア！」

俺はそう言ってキルアに抱きつぶ。

「わっ…？コキ…何すんだよ…？」

キルアは顔を赤くしながら慌てだす。

「何って感謝を表現してるんだけど」

それを聞くとキルアは口メカニヒ手を離してため息をつく

「…誰彼構わずにこうこう口上はするなよ、いひいろ危ないから」

?イロイロ?

俺が首をかしげるとキルアは何でもねー、と手をヒラヒラ振った。

……へンなの

「まあお互にプレートも集まつたことだし試験終了まで時間潰そー

「ゼ

俺はその誘いに頷いて 残り四日間をキルアとおしゃべりして過ごした。

* * * * *

ボ ッ！！！

『ただ今をもちまして第4次試験は終了となります、受験生のみなさんすみやかにスタート地点へお戻り下さい』

さて、サバイバルは終わり。

いよいよ最後の試験だね。

俺は島に張り巡らせていた糸を回収してからキルアと一緒にスタート地点へ戻った。

「キルア！コキ！無事だつたんだね！」

「当たり前だろ？お前こそヒソカのプレート取つてんじゃん」

駆け寄つて来たゴンにキルアがそつまつとゴンは複雑そうな顔をする。

確かに貸しとか言つて渡されたんだよね、そのプレート。

ゴンってとにかく真つ直ぐな性格だから不本意なんだつなあ…

俺はゴンの頭に手を置いてポンポンと撫でる。

「どんな形であれ、それはゴンが手に入れた物なんだから胸を張れ

よ

ゴンはその言葉に驚いて俺を見る。

「納得がいかないなら納得できるまで精進すればいい。力が足りないとと思うなら努力すればいい。それはゴン次第だ」

俺はそう言ってから薄く笑う。

ゴンは少しポカンとしていたけどすぐ口元に笑顔を取り戻した。

「うん！ ありがと、コキ」

「じゃいたしまして」

「うん、やつぱりゴンはいつもじやなことね。」

元の調子に戻ったゴンを見て俺は改めてそう思った。

「ほのぼのしてるといい悪いんだけど無視しないでくんねー？」

「「…あ」」

横を見るとキルアが腕を組んでジトツと俺らを見ていた。

レオリオとクラピカは苦笑いを浮かべている。

「『ゴメン』『ゴメン』拗ねないでよキルア」

「別にスネてねーよ」

ふん、とせっぽを向くキルアを「コンが宥める
」——やーといふは子供なんだよなあー

俺は一人のやりとりを眺めながらまるで保護者になつたような気分
になつた

最終試験まで もの

『え これより会長が面談を行います、番号を呼ばれた方は2階の第1応接室までおひじり下さい。それでは受験番号109番の方』

「面談…？」

「これが最終試験…？」

アナウンスにゴン達は首を捻る

「たぶん最終試験の参考にするんじゃない？俺は呼ばれたから行く
ね」

ヒラコと手を振つてから俺はみんなと別れた

「おお、よく来たの。まあわりなさい」

「あこや、師匠」

ネテ口を促されて俺は正面に座る。

「試験はどうじや？」

「ん~俺的には少し物足りないですな」

「ほつほつ、そつかそつか。では試験の参考までに少し質問するが
よいか?って言われてもねえ…」

「拒不權ないんでしょ?いいですよ別に」

俺は正座を崩して向き直る

「ふむ、ではまず、なぜハンター試験を受けたのかな?」

「…仕事で依頼された、ランクが上がると便利だからが建前だね」

「ま、では本音では？」

その言葉に俺は卓袱台をバシッ！と叩いて身を乗り出す

「アンタとジンが内部試験官やれつてしつこからでしょーが！
毎回毎回ホームカードに世間話を交えながら受験の催促なんかして
！」

「何あれ！ストーカーよりタチ悪いよ……」

「ひょっひょっひょっ」

「ひょっひょっ、じゃねえ……」

「ええいこの狸ジジイ……、ヒトの留守電に延々何時間も下らない
与太話入れといて謝罪もなしかいつ

「アンタは絶対俺が殺しますからね、勝手に死なないでください」

頬杖をついてジト目で言つてジトイサンは

「ほつほつ、努力しようかの」

と楽しそうだ。

…世の中には煮ても焼いても食えない奴がいるってホントだなあ…

俺は呆れて肩を竦めた。

「さて、話を戻そつかの。ではおぬしが一番注目してるのは?」

「うん… 44、99、301、403、404、405だけど…、
一番なら405ですかね」

「ふむ… では一番戦いたくないのは?」

「全員」

俺は間髪入れずにピシヤリと言ご放つ

「ほ…、それはなぜじや?」

「まず99、301、403、404、405は知り合いでだから却下。

44は俺と唯一マッチさせたかったけど変態で身の危険を感じるから却下。

残りは下手打つとあいつ終わっちゃう。」「そうだから却下。以上

俺はそう言ってから欠伸を一つする。

「ふうむ……なるほどのお……。つむ御苦勞じやつた、ちがつてよい
ぞよ」

「はいはい、質問の内容からして

最終試験は一対一のトーナメントか何かですか？」

俺は立ち上がりながらネテロ会長の方を見ないで呟く

「……相変わらず鋭いのう。コキ」

「ははは、じつう

俺が応接室を出ようとすると、師匠から声がかかる。

「……では最後にコキはどう思つてゐる感じ?」

「……

今の質問がどうこう意味なのか理解し俺は思わず口を噤んだ。けれど師匠は早く言えと田をカツと見開き続きを促す。

「よく……わからない、です……けど、その……」

仲良くなりたい、と俯いて途切れ途切れに言つと師匠は小さく笑つた気がした。

…俺みたいな汚れた奴が純粋な子達と仲良くしたいなんてやつぱり間違ってるんだ。

「あー……やつぱ今のはナシで。ていうか俺最近おかしいんすよね。今まで人の心配なんてしたことなかつたのに、ゴン達のことを心配したりもう自分が気持ち悪くて…」

「（ふむ、ユキもやつと人間らしくなってきたつてことかのオ。このままいい方に進んでくれるとありがたいんじゃが）」

「なあ聞いてる？」

「何じゃまだおったのか。もう下がってよこせ」

「（）さんのクソジジトイ…）」

文句を言おうとしたが何したってこの人に勝てないことを
痛い程理解してる俺はほんの少し芽生えた苛立ちを押さえ込み退室
した。

最終試験。その一

「最終試験は一対一のトーナメント形式で行つ」

ホテルの広間に全員が集まりネテロ会長の最終試験についての説明に耳を傾ける

その後サトツさんから聞いたのだが、俺も最終試験に参加することになつたそうだ。

そして、内部試験官がいた、といつことは、なしだと。

「その組み合せは」「いや」

そう言つてネテロ会長が幕を引くとトーナメント表が現れる

ええ～と……俺の相手は……

.....。

俺は無言で金ダライを具現化してジイサンに向かって投げつける。

グワアアアアン！！

寸分違わぬコントロールで投げられたタライは狸ジジイの後頭部を直撃した。

「ユキ！？何やつてるのーー..？」

「つてかお前あのタライ何処から持ってきたんだよー..？」

『ンとキルアが驚いたように聞いてきた。

ちなみに他のメンバーは眼を丸くして固まっている。

「ゴメン、ゴン達。今はそんな質問に答える気分じゃねえ。

俺は周りを無視してネテロ会長に詰め寄る。

「うううとーなんぞよつこむよつてヒツカナのセー？」

俺はネテロ会長の近くでボソボソと問い合わせる。

「しかたないじやう、必然的に誰かと鬭わねばならんのじやから。
それに44番以外の受験生が全員お主との闘いを拒否したんでの」

「はあー…マジでー…」

「大マジじや」

「ゴン達なら分かるけど他のヤツまで戦闘拒否？

「アハ、怒りに任して一跳び飛ばしたりしたからかな

チラ、と後ろを見るとヒソカが一矢一矢しながら既にスタンバつて
いる

くあ～、強い人と殺り合つのは好きだけビ、あいつ重度の変態だし
なあ…

「ほれ、いつまでもグズグズしちらんでとつとつとかんか」

ジイサンに背中を押されて俺は泣々ヒソカと向き合つた。

「それでは、第1試合…

ユキノ対ヒソカ…！」

俺は背負つていた「破壊方式」を手にひとつヒソカを見据える。

「始め…。」

立会人の合図に会場中に緊張が走る

俺とヒソカはお互い見つめ合つたまま微動だにしない

「へへへへ……まさかこんなに早くユキと闘えるとは思わなかつたよ」

心底楽しそうにヒソカはトランプを捌く

「……俺はまだ闘つなんていつてないけど?」

「……？」

俺の眩さにヒソカが不思議そうに尋ねる。

「ヒソカが俺と闘つに値するかまだ分からぬからね

そう言って俺は「破壊方式」を水平に構えて腰を落とす。

同時に滲み出る殺氣に部屋の空気が数度冷え込んだ。

「これで死ぬようなら、俺と闘う資格は無いよ」

俺の言葉にヒソカはよう一層笑みを深くしてトランプを両手に構える。

刹那、ユキは間合いを消し去ったかのようなスピードでヒソカの眼前に現れ、真一文字に刀を薙ぐ。

《一薙き　ワン・スラッシュ》

「破壊方式」を使用した場合での自身最速の一撃。

ヒソカは皮一枚でその一閃を躱し、両手のトランプをユキの急所に向かつて投げつける。

ユキも上体を捻つてそれを躱し、反動を利用して斜め上段から一気に刃を振り下ろす。

それはバックステップで距離をとるヒソカの肩を僅かに引き剥ぎ、勢いそのままに床を真つ一つに分断する

「へえ…俺の一発を避けた上に反撃までしてくるなんてね…」

思つた以上かな、これなら必要以上の手加減は要らないね

コキは愉しそうに僅かに口端を吊り上げる

「くつくつ…美味しそうとは思つていたけどこれほど極上の果実だったとはねえ」

ヒソカもまた嬉しそうに笑つて新たにトランプを取り出す

「”合格”だよ、ヒソカ」

やつ言つてコキは「破壊方式」を肩に担ぐ

愉しげに細められた双眸から覗く眼光は蒼色に染まつっていた

「おやキリの瞳は確かに紅だつたと思つただけだ

「ハツ…」これは俺が本気に成った証みたいなものだよ

親指で自分の眼を指しながらコキは言つ

「ああ続きとこいつか。今度はお試し期間じゃあねえから、本気で来ねえとあつむつ殺しちまうぜ？」

一タリ、と今迄と打つて変わつて凶悪な笑みを浮かべ、コキは肌を引き裂くような強烈な殺氣を引き出した。

ヒソカはそれを心地良さそうに受け、自らも禍々しい殺氣を発する

周りのギャラリーの殆んどはこの場に居るのも辛うじて脂汗を滲ませる

「踊りのギリギリ、ヒソカ。円舞曲をな^{ワルツ}」

コキは呟く

そして、誰かが鳴らした喉の音を合図に、一人の姿は搔き消えた。

最終試験。その一

ヒュッ！

シュンツ！

ガギーンツ！

風を切る音、金属同士のぶつかるような音、大小様々な音が会場中に響き渡る

相手の攻撃を紙一重で

または余裕綽々で躊躇し

或いは武器で受け

更には体捌きで受け流す

流れのような攻防、無駄の一切省かれた
舞踏のような闘いに誰もが思わず息をのむ

ガキイイン…！

ヒソカの一撃にユキは仰け反つて「破壊方式」を手放した

ヒソカはその一瞬を逃さずユキにトランプを振り下ろす

「…？ ユキ…！」

ゴンは思わず悲痛な声を上げた

刹那、勝利を確信していたヒソカの顔が驚愕に染まる

仰け反つたユキは、まるで悪戯の成功した子供のよつこ、愉しげに笑っていた

「甘えんだよ」

ユキは右手の指を熊手のよつこ構え、そのまま腕を鞭の如くしなりせてソレを振り抜いた

『一喰い イーティング・ワン』

本の世界の殺し屋（人間シリーズ、戯言シリーズ）

ただ純粹な戦闘能力だけなら人類最強の

哀川潤さえも凌ぐ『人喰い』匂宮出夢の一撃必殺の究極技

至近距離からの神経伝達速度を越えた一撃に対して、

ヒソカは丁度腕を振り上げた状態 つまり、全くの無防備だった

ユキの一振りはヒソカの脇腹を直撃し、爆発のような轟音と共にヒソカを壁まで吹き飛ばす

「残念でした、武器を手放したのはアンタに完全な一撃を入れるフェイクってワケ」

蹲るヒソカを見据えてユキは言つ

「くくく…、まんまと騙されたワケだ」

ヒソカは左脇を抑えてゅうりと立ち上がる

「無理しない方がいいんじゃない?」

かなり手加減したとはいえアバラ5本は確実に“喰つた”はずだし

ユキは右手をヒラヒラさせる

「本気で打てば胴体真っ一いつできんだけど、それやつちやつと失格だしね?」

「冗談だけど。

おどけた風に言つとヒソカはやれやれといった感じに肩を竦めた

「確かにこのまま続けてもボクに勝ち田はなさそうだね参ったよ、

ユキ」

「ほいわつや」

ユキは軽く受け答えて、転がつてゐる「破壊方式」を背負い直す

「し……勝者、ユキ!」

立会人の言葉にユキは右手を突き上げた

最終試験。その三

さて、コレでやっと終わりだね。

「す、いやコキ・ヒソカを倒すなんて！」

「てゆーか最後の平手打ち音おかしかつただろー！お前ホントに人間かよー？」

試合を終えてみんなの所に戻るとゴンとキルアが詰め寄ってきた

キルアにいたっては俺の右腕をつつきながら「信じらんねえ…」とか呟いている

肉体操作して心臓抜き取るキミにだけは言われくなかったよ、うん

一人を適当にあじらついているとクラピカが神妙な面持ちで近づいて

くる

「ユキ……、君はクルタ族なのか？」

その言葉にゴン達ははっとして俺の顔を見る。

ちなみに眼は既に元の紅に戻つていて蒼くはない

うへん……やっぱりクラピカの田の前で眼の色を変えたのは失敗だった
なあ……

生き残りが他にいるかも、みたいな淡い希望持たせちゃったかな？

「残念だけど俺は蒼迅一族、クルタ族じゃないよ」

俺が肩を竦めてそう言つとクラピカは僅かに表情を曇らせる

「クルタ族は普段茶色の瞳で興奮すると緋色になるんでしょ？俺は
普段が紅で、

変わったときに蒼になるからね

「……そつか…すまなかつたな、ゴキ」

「いや、気にしないでいいよ。アレを見れば誰でも勘違いすると思
うし」

元の世界でもよく兄さんとクルタみたいてあそんでたし。

あの時はまさか本物と対面する時が来るとは
思つてなかつたなあ……

「ねえクラピカ。クルタじゃなくても俺はクラピカの仲間だよ?」

俺は俯いてるクラピカの顔を覗き込んで薄く微笑む

「…一ああ、ありがと」

クラピカは驚いた顔をしたが、すぐに立ち直つて笑みを浮かべる

「オレ達のコト忘れてんじゃねーかい?お一人さん」

「モーだぜ、のけ者かよ」

レオリオとキルアが抗議の声を上げたのを見て
俺とクラピカは顔を見合させて笑った。

「ウォッホン！試験を続けてもよろしいかな？」

ネテロ会長が咳払いをして俺をジットッと見つめる

あ、試験のことすっかり忘れてたよ

周りを見渡すと他の受験生達は微妙な顔をしてコッチを見ている

ワオ、晒し者状態？

「あ、じゃあ俺合格したし外で休んでいい？·ちょっと疲れちゃつ
たし」

なんか居たたまれないので早口にネテロ会長に聞くと好きにせいいと

言われた

「んじゃー！みんな大丈夫と思つけどがんばってね！」

俺はそう言つてみんなと別れて足早に出口に向かう

「あまりキルアをいじめるなよ？友人」

「…」

去り際に扉の近くにいたイルミの耳元に囁いて俺は会場をあとにした

バタン…

「ふう…。まあしかたないよねえ」

本当は疲れてなんかないしあのまま会場に残つてみんなの応援した
かつたけど…

「うつかりハゲゾー殺しちゃうかもだしなあ」

仲良くなつた仲間がいたぶられているのを見て
正気を保てるほど俺は人間出来てないしねえ

「…それにイルミを止めちゃうそうだしなあ。
ゴンとキルアの絆を深めるにはあの一件は必要だろ？」

キルアにはキツイだらうけど、本当にゴンと友達に成りたいってこと再認識してもらわないといつまでも闇から抜け出せないままさらうからな

まあこの一件が終わつたらひとつそり頭に刺さつてる念は除念してあげよ

「なんでも思い通りにいくと思つたら大間違いだよ・タラちゃん…
……」

「いるみんでもいいな」

俺は廊下を歩きながらそう呟いて一人笑つた

最終試験。その四

五時間程して会場前まで戻つて来ると頬に返り血を着けたキルアが
出て来た

眼に光は無く本当に人形のような状態で俺の横を黙つて通り過ぎて
行く

「キルア」

俺は振り返りずに口を開く、キルアも立ち止まりずにそのまま足を
進める

「俺にとつても『ゴン』にとつてもキルアは大事な友達だよ。俺なんか
でいいならな。
誰が何と言おうとその事実だけは変わらない」

「.....」

キルアは返答せずに廊下を曲がつて姿を消した

「...思った以上に闇は深いみたいだね」

俺はそう呟いて会場の横にある控え室の扉を開けた

* * * * *

バン！！

「キルアにあやまれ」

あの後日覚めてからキルアの失格と内容を聞いた
ゴンは一直線に会場のイルミの所に向かつてそう言った

ちなみに俺はついつい今は入り口の壁に寄り掛かっている

「あやまち……？何を？」

イルミはゴンを見ないまま返答する

「お前に兄貴の資格ないよ」

「？兄弟に資格がいるのかな？」

その瞬間、「ゴンはイルミの腕を掴んで席から引っ込抜いた

「友達になるのにだつて資格なんていらない……」

骨の軋む音を響かせて「ゴンはイルミを睨む

「 もうあやまらなくたつていいよ。案内してくれるだけでいい」

「 そしてどうする？」

「キルアを連れ戻す」

その後、レオリオとクラピカの異議申し立てはネテロ会长に却下され、

ポックルとクラピカの諍には「ゴンの一言で打ち消された

「それより、もしも今まで望んでいないキルアに無理矢理人殺しさせていたのなら」

「お前を許さない」

ギシ、と一際大きく骨の軋む音が響く

……折れたな

「許せないか…… ドーピルアルヘ。」

イル//は骨折にも顔色一変えず、パンに尋ねる

「どうもしなこと。お前達からキルアを連れ戻して、もつ合せな
ことよつにすむだけだ」

「パン、それはどうもしてると想つんだけじ?」

ツツコ//たいてどシリアルをぶち壊してしまつので、
俺は眞面目な顔をしたまま心の中でツツコ//を入れる

「…………」

イル//は無言でオーラを纏つた左手をパンに向かへる

「……」

パンはイル//の手が触れる寸前で飛び退いた

流石野性児。五感の鋭さは一級品だね。

俺は、ゴンの背後に立つて人差し指でイルミに念の文章を書く

『素人に念を当てるな、ゴンに手を出したらイルミでも容赦はしない』

イルミはそれを見て多少不機嫌そうに視線を反らした

「さて諸君よろしいかな？」

ネテ口会長のその言葉で講習会は再開した

「ギタラクル、キルアの行つた場所を教えてもらひつ」

講習会が終わつてからゴンはイルミに詰め寄る

「やめた方がいいと思つよ」

「誰がやめるもんか。キルアはオレの友達だーー絶対に連れ戻す！」

「…後ろの3人も同じかい」

イルミはゴンの背後に立っている俺達を見て問い合わせる

「当然よ」

「Y e s M y l o a d」

俺とレオリオがそう言つと、イルミは黙つて踵を返す

「ギタラクル！」

ゴンが怒ったように叫ぶとイルミは俺をチラリと見る

「キルは自由に戻つているはずだ。場所を知りたいならユキに聞けば？」

その言葉に3人はバツーと俺の方を振り返ってきた

「ユキ場所知ってるのー?」

「てかなんでアイツお前のコト知つたよつて話してんだよー!?」

「ユキ、ヤツとまじうこう関係なのだ?」

ズズイックと身を乗り出していくgon達から身体を反らせながら後退る

「あ～いや～…、実はゾルティック家に
遊びにいった（拉致された）ことがあるんだよねえ」

かはは、と笑つて言つと みんなは一団フリーズする

まあ予想通りの反応だねえ、

でも細かく説明するのも面倒臭いし要点をわかつやと言こますか

「パドキア共和国テントラ地区にある標高3722メートルの山、
ククルーマウンテン。その頂上にゾルティック家は存在する」

最終試験。その五

その後、他の受験生と別れを告げて俺らはパソコンの前に座つてこの

「パドキアは飛行船で3日位だけビニツ出発する?」

「――今日のうちは――」「

「アイアイサー」

ゴン達の返答に俺はチケットを手配する

「ユキ、次はハンターのページでジンってとこめくつてみてくれる
?」

「え? ジンをめぐるの? ジンの知り合って?」

俺は首だけで振り向いて尋ねる

「うん、ジンは俺の親父なんだ。
サトツさんがそうすればジンがどんな人物かわかるって」

「ああ……なるほどね」

俺は「ンの言葉に片眉を吊り上げてジンのページをめくる

ピーツ ピーツ

「?.?.?.?」とだ?「こいつは」

「極秘指定人物つてワケだよ」

俺は椅子を回転させて「ン達に向き直る

「これに加入すると電腦ページ上での
あらゆる情報交換が禁止されるんだよ。
ただし、個人が加入するには大統領クラスの権力と莫大な金が必要
だけどね」

「ツ、と笑って説明すると三人は絶句していた

「…ゴン、お前の親父は予想以上にとんでもねー人物みたいだな」

「うん」

レオリオの眩まに、ジンは嬉しそうに返答する

「ユキは知つてたの？ジンが極秘指定人物に加入してゐつて」

「ん~、まあ師匠みたいなもんだし親友だしね。

それに俺も加入してゐるし、コレ」

そう言つて俺は後ろ手で俺についてのページをめくる

「……ホントだ…」

「お前マジで何者だよ…」

「…開いた口が塞がらないとは正にこの事だな…」

三者三様の反応に笑みを深めて俺はパソコンの電源を落とした

「俺はユキノだよ、それ以上でも以下でもない」

俺がそう言つて立ち上ると、

三人は苦笑いしながら、それもそうだと頷いた

御先訪問。その一

ゾルティック家訪問も3年ぶりなんだよなあ

あー…、キキヨウさんとかになんか言われそつだな…

飛行船で飛ぶ」と3日、

電車で揺られる」と2時間定期バスに乗ること30分

只今、ゾル家の試しの門の前に来てあります

いや～～今まで長かった…

いまだにはじめでも アでひとつ飛びだつたから

まさか普通だとこんなにかかるとは思わなかつたよ…

ホーント便利な能力してるとなあ、俺つて

ぼーっと扉を眺めながら考へてると

賞金稼ぎっぽい二人組が守衛さんから鍵を奪い取つて中に入つていへ

馬鹿だなあ……扉の向こうの気配にも気付かないのか…

冷めた目付きで扉を見つめていると数分と待たずに2体の骸骨と曰
大な腕が扉から出てきた

前から疑問だつたんだけど、

どーゆー食べ方したら原型保つて服着たままの骸骨になるんだろう?

ミケつてす、いのか…………?

「え、皆様御覧いただけましたでしょ? 一歩中に入れればあの通り無惨な姿をさらすことにして……」

バスガイドさんは少しも取り乱さずに解説を始める

日常茶飯事なんだろーなあ」「ゆー事態

俺は慌てふためく観光客を尻目にゼブロさんに近寄つて耳元で囁く

「お久しぶりです、ゼブロさん」

「おや、ユキノ君じゃないですか」

「そこの3人はそのことを知らないので3年前から
ゾルティック家と知り合いだつて言わないで下さいネ？」

人差し指を口に寄せて言つとゼブロさんは3人を見回して頷いた

「なるほどねーキルア坊っちゃんの友達ですかい」

俺らはバスツアーバスを抜けて守衛室でお茶を啜る

あ、この緑茶玉露だ

「うれしいねーわざわざ訪ねてくれるなんて。

20年勤めてるけど友人としてここに来てくれたのはユキノ君以来
初めてだよ」

まあ暗殺一家に友達として遊びにくるなんて普通いないよねえ

そもそもあの人達が進んで友達作るとはとても思えないし

俺は窓から山頂を眺めて一気にお茶を煽る

「しかし、君らを庭内に入れるわけにはいかんです」

ゼブロさんの言葉から正門には鍵が掛かっていないといふ話に繋がり、

レオリオが門を押し始めた

ん~…まだみんなじゃ力不足か…

「押しても引いても左右にもあかねーじゃねーかよー」

「上にあげるんだつたりして」

「単純に力が足りないんですよ」

「アホか……全力でやつてるつてんだよー」

ゼブロさんの言葉にレオリオが吠える

レオリオ、その程度はこの家のヒトにとって全力とは言わないんだよ

「この御当主ソレを止手で今まで開けちゃうから

文句を言つてレオリオを諫めてゼブロさんは?の扉を開けてみせる

「年々これがしんどくなってきたね。でも開けられなくなったら
クビだから必死ですよ」

ゼブロさんは服を直しながら笑つて言つ

まあ普通ならこの歳で片方2トンの扉開けるほつが異常なんだけど

ゼブロさんは念修得してないのにねえ

「ちなみにキルア坊っちゃんが戻ってきたときには?の扉まで開きましたよ」

「?……ううじま、12トン……」

「……16トンだよ!」

俺とクラピカのシッコリがハモる

俺もこのシーン見たとき計算してみたんだけど、18にしかなんなかつた。

何で全く関係ない数字になるのや。

御界訪問。その一

「おわかりかね？敷地内に入るだけで」の調子なんだ。
住む世界が全く違うんですよ」

ゼブロさんの発言に「コンは試されるのは嫌」とね始めた

うへん、それは俺も同感だけど…

あの人外な方々と付き合つにはその位できないと
命いぐつあつても足りないのだが、コン

ゴンの意見にゼブロさんは仕方なさそうに
電話をかけるが打ち切られ、それを見たゴンが執事室にかけなおす

「いいからキルアを出せ……」

…くあ〜、知つてたけど ビックリしたあ
…

「ゴトーさん鼓膜破れなかつたのかなあ…？」

「ほーぜんと驚いていぬとビハヤハ行はせ電話を切られた」様子

ん…、ちょっとスマーズに話進める根回しするかな

俺は「ンから受話器を取つて執事室の番号を押す

ブルルル
ガチャチャ

『はい、ゾルティツク家

執事室

「相変わらずですね、ゴトーサン」

『!?. その話は.』

俺の応答に受話器の向こうから困惑した空気を感じる

「久しぶりですね、ユキノですよ。

まあ声だけじゃ信じられないでしょ? から

これから俺そつちに行きますからシルバさん達に

一息でそう言い切つて返答を待たずに叩き切つた

「じゃ、せうこい」とだから俺は先に行つてゐるから。
あと、ゴン? こんな扉も開けられなによ! ジヤ・キルアと対等になるなんて無理だよ、
試す試さない以前の問題」

俺は突き放すように言つて試しの門に手を掛けた

ギィオオオーン…

…ふむ、紅眼じやなかつたり? までが限界か

「ゴキ…」

後ろからゴンの怒つたような困惑したような
叫びが聞こえたので振り向かずそのまま返答する

「J.R.Iのメンバーはみんなこれを軽々開ける。
友達を語るならせめて同じ土俵に上がりなよ。俺とジンみたいこそ」

それだけ言つて手を離すと轟音を響かせて扉は閉じた

* * * * *

「……ひょっと言こすぎたかな？」

ゾル家に向かつて走りながら俺は駆く

でもこれからのことを考えると、の席位開けてもらわないと困るしながら

それにゴンとキルアには、

お互いつき合って切磋琢磨しあうことで成長していく欲しいから、

まずはゴンがキルアに実力的にできるだけ近づかなければいけないし

「ま…なんとかなるよね、ゴンはあの程度でへ！」むよしなタマジゅ
ないから

むじる問題はキルア、つてゆーかゾルティック家の方にあるナビ、
それは俺がなんとかしよう

俺は足を止めて屋敷の入り口直前で止まる

「お久しぶりです。いるのは分かっていますよっ・シルバさん、ゼノさん？」

その言葉に一つの人影が柱の影から現れる

「本当に久し振りじゃの。一体今まで何をしておったのじや？」

その質問には答えず、俺は話を進める。

「今日は友人としてキルアに会いにきました。更に言えば連れ出しひ、ですけどね」

俺がそう言つと一人の纏つオーラが変わった

「友人か、あいつにそんなものは必要ないと思つが？」

「必要です。キルアは精神的に脆い。
支えとなり共に成長していく存在が不可欠。このままいけばあの子の精神は破綻します」

俺は笑みを消して二人を見据える

「ほつ?まるでわしらがキルのことを理解できていよいような口振り
じやのづ?」

ゼノさんが笑いながら尋ねてくる、ちなみに眼は全く笑っていない

「みたいじゃありません。理解していなこと言つてゐるんですよ」

その瞬間辺り一面に三つの巨大な殺気が立ち籠めた

「……シリセラ問答は仕舞このようじゃの。ユキ、お主何を企んでお
る」

ゼノさんの問い掛けに俺は笑みを深める

「なこ、ちょっとした賭けをしようと思つてましてね」

「賭けだと？」

「ええ、俺がアナタ達に勝つたらキルアが友達を作つて自由にや
ることを認める」

「まつ？ ではお前が負けた場合はどうする？」

シルバさんは片眉を上げて愉快そうに聞いてくる

「なんでもこいですよ？ 殺すもよし、タダ働きせぬもよし、好き

にして下せ。」

ぼくは眼を蒼く染めながらそう言ってオーラを練る

「ほう、ではお主が負けたらゾルティックに養子に来る。と言つのはどうじゃ？」

「……上等」

ゼノさんの提案に俺は短く答える

どんな条件だらうと関係ない、キルアのためにも敗北の2文字はあり得ない

俺は「破壊方式」を肩に担いで戦闘態勢に入った二人を見据える

「それでは、始めましょう

それと同時に一人の姿が消え、前後に殺氣を感じ取る

シルバさんの上段蹴りを躊躇つつ「破壊方式」を横に薙いでゼノさ

んから距離をとる

「ンビネーションを取らせると面倒だな…

俺は《模版解答 チートコピー》でカストロのダブルを使用し一手中に分かれる

分身は念を使えないけど体術は俺と同等、時間稼ぎにはなる

分身をシルバさんに向かわせて俺はゼノさんに挑み掛かる

「フン！ 戦力を分断させる腹か！」

ゼノさんは手にオーラを集中させて龍の頭を作り出す

《牙突 ドラゴンランス》！

「チイツ！？」

避け切れず頬を掠めたことによつて右頬に赤い線が奔る

ああっぶねエ！

「『一羅ツ ワン・スラッシュ』！」

カウンターで懐に入り込み持ち得る最速の一閃を叩きこむ。

しかし頬を掠めて怯んだ分ロスが生じ、肩を多少抉る程度に終わった

チッ、今ので決めるつもりだったのに！

刹那、殺氣を感じて上に飛び退くと念弾が脚を掠める

振り向けばシルバさんが分身を碎いてゼノさんに加勢に来ていた

俺は小さく舌打ちして曲絃糸で一人を攻撃する

ゼノさんは紙一重で躲したが、

シルバさんは念弾を撃つた直後のスキが災いして全身に糸が巻き付く

っし！捕らえたっ！

これで事実上一対一つ！

俺は反転して着地し、シルバさんの方を向く

「甘いわー！」

ブチブチブチッ！

「んなあああああああー！？」

曲絃糸素手で引きちぎつたよこの人！？

ビーゆー 身体構造してんだよ！？ハルクかあんたは！？

「ひっせーーー！」

「ーーー！」

驚愕に固まつてこると背後からゼノさんに突かれて脇を抉られる

げ、しかも意外と深い…

俺は瞬歩で一気に二人から均等に距離を取る

「あ～…一人をちまちま相手にしたらキリないな。氣イ乗らないケド大技使うか」

追つてくる一人から逃げながら俺は胸元で手をかざして詠唱を始める

『黄昏よりも暗き者…血の流れよりも赤き者…

時空の流れに埋もれし、偉大なる汝の名において…』

俺の異変に気付いた一人は勝負を決めるべく一気に間合いを詰めてくる

でも、もう遅い！

『我、此処に汝に誓う。我らが前に立ち塞がりし、
全ての愚かなる者どもに、我と汝の力をもて、等しく滅びを与えん
ことを！』

一気に言い切って振り向きざまに一人に向かつて両手を突き出す

『竜破斬 ドラグスレイブ！』

その瞬間、眼も開けられない程の強力な閃光が辺り一面を白く染め上げた

御界訪問。その三

ズズウウウン……

「うおっ、何だ？ 地震でも起きたのか？」

「違うよレオリオ。山頂付近で大きな爆発があつたみたい」

「爆発ウ～」ヒット死火山じゃなかつたのかよ

「……もしかするとユキの身に何か起きたのかもしれないな……」

「何かつて？」

「それは分からぬ。しかし余り悠長に鍛えている場合ではないな

「そーだな、いつまでもキルアとユキを待たすわけにもいかねーぜ」

「うん！ 急いで鍛えて早く一人に会いにいこう……！」

「ああ」「ぬつよー。」

ヽヽヽヽヽヽ

「……やはり、やりすぎた」

俺の目の前には直径百メートルほどの巨大なクレーター

……やっぱり試したものない大技をぶつけ本番はマズかったかな
あ……

一応出力抑えて撃ったのにこの有様は問題だよね

「シルバさん、ゼノさん、生きてますかー？」

焼け野原となつた一帯に向かつて呼び掛けてみると
地中から一人がズタボロになつて這い出てきた

うん、なんかゾンビみたい

「やれやれ…死ぬかと思つたわい」

首を鳴らしながらゼノさんが言つ

「てゆーか『竜破斬 ドラグスレイヴ』直撃して生きてるなんて絶
対アナタ達おかしいです」

「こんな大技繰り出して平然としどるおぬしに言われたくないのぉ

俺の言葉にゼノさんが半目になつて睨んできた

ぐつ…、痛いといふを…

でも曲絃糸素手で引きちぎつたり『竜破斬』食いつて立つてゐる67
歳よつはマシだい！

俺はゼノさん達から視線を反らしてクレーターの方に向き直る

……流石にヒトたちの庭に大穴開けっぱなしにするワケにもいかないもんなあ……

「《双天帰原》私は拒絶する」

俺が言靈を紡ぐとクレーターの周りに結界が現れ、破壊された一帯が元通りに再生していく

「……おぬしはまるでシヴァのようじゅのう」

ゼノさんはその光景を見ながらポツリと呟いた

「破壊と創造、踊りを司る神様ですか？俺はそんな大それた存在じゃありませんよ」

俺は肩を竦めて苦笑する

「舜桜、あやめ。ついでにこの一人も治してあげて」

俺は結界を張つている一人の妖精にゼノさん達を指差して頼む

ゼノさんがあしらはオマケか、とか愚痴つていたけど無視しどいた

* * * * *

「じゃ、ユキ。また用があつたら喚んでね」

「おーう、一人ともサンクス」

ゼノさん達の治療を終えて俺は舜桜とあやめを消す

「あれは意志があるのかの?」

ゼノさんが尋ねてくる

「ええ、意志もあるし思考もする自律的な存在ですか？」

てゆーか俺が召喚するヤツは大抵自分の意志持つてるヤツばっかだし?

中にはわがままなのもいて大変なんだよね〜…

遠い田をして召喚関連の修行を思い返しているとシルバさんが口を開く

「ユキ、キルを連れ出してどうするんだ？」

振り返つて見ると父親の顔をしたシルバさんがいた

「別に俺はどうこうするつもりはありませんよ。ただキルアは此処にいるより外の世界に触れる方が成長すると想つから連れ出します」

笑つて言うとシルバさんは屋敷を指差す

「キルは今地下の独房に居る。お前の田ならすぐ見つけられるだろ？」

「会つていいんですか？」

「おぬしは賭けに勝つたんじゃ、当然じゃねつて」

俺の質問にゼノさんが肩を竦めて答える

意外だなあ……」ねると思つてたんだけど

「何よりおぬしを怒らせるククルーマウンテン」と洩し飛ばされ
そうじやからの」

「アナタはヒートのことなんだと思つてゐるんですか?」

いや確かにそれクラスの破壊力の能力はありますよ?

だからいつちよつといねられただけでんな暴挙に出るわけないでし
ょーが

俺はゴジラか

「……じゃ、会いに行つてきます」

俺が頬を吊りせながら歩みだすとシルバさんが俺を呼び止めた

「ユキ、キルを連れ出す前にオレの部屋にアイツを寄りさせてくれ

「りょーかいしましたー」

ふらふらと右手を振つて俺はそれに返答した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6478y/>

狩人物語

2011年11月25日20時58分発行